

---

# これは夢ですか？いいえ、それは転生です

宇佐美遊佐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

これは夢ですか？いいえ、それは転生です

### 【Nコード】

N1363S

### 【作者名】

宇佐美遊佐

### 【あらすじ】

神様の遊びにまきこまれてしまい死んでしまった主人公オウジタヤ橙藤拓也。

新しい生と、若干のチートを手に入れた彼。

これから彼の転生物語が始まります。

注）これはゾンビですか？の転生ものではありません。

タイトルの雰囲気だけパクらせてもらいました。

## プロローグ（前書き）

どうも初めまして。

宇佐美遊佐と申します。

いつもは読み専の私も書いてみたい衝動にかられ遂に書いてしまいました。

駄文で意味不明でご都合主義な小説ですがあたたかい目で見守ってください。

## ブローグ

・目を開けたらそこはあたり一面真っ白な世界だった・

「あれえ？ずいぶん変な夢見てるな。」

てゆうかまず寝た記憶がないんだが…。

よし、状況確認だ。

俺の名前は橙藤拓也<sup>とうでうつたけや</sup>

どこにでもいる普通の（若干廚2病）高校生だ…たはず？

「どうも記憶にあいまいな点があるな…。」

たしか今日も今日とて特になにもなく、さつさと家に帰ってPCゲーをやるうとしてた…とまでは思いだした。

「そういえばこの風景、転生小説のよくあるテンプレだよなあ」

そのとおりーなのです!!

後ろからいきなり声が聞こえた。（上下左右白だから後ろかどうかは不明だが…）

振り返って見ると幼J O…

幼女じゃないのです!!。神さまなのです!!

ふんす!!と平坦な胸を反らす幼女（神）

「…いや。羽入なのか、唯なのかどっちかにしてくれ。」

まあ平らだからどちらでもないか…

誰がぺったんぺったんつるぺったんなのですかー！！

あ、心の声が聞こえてる。

とゆうことは…

そうなのです。あなたは死んでしまったのです。

そう…か。

でもなんで俺は死んだんだ？

あなたは帰る途中、工事中のビルから落ちてきた鉄骨に下敷きになってしまったのです。

…うげえ。そんなことになってたのかよ。

忘れてて良かった。

ですがあなたはそのまま記憶を持ったまま転生し、新たな世界へと旅だつのです

「え！？だいたい転生物つて本来死ぬはずじゃなかった人とか変わりに死んでしまった人とかだよな？」

なんで転生出来るんだ？

それは、私が遊んでいたらあなたがそこにいたのです

あ、遊びだと…

鉄骨を風で揺らしてヴァイキングゴッコしてたらワイヤーが…全く最近のワイヤーはやわなのです

おまえのせいだ！

とゆうわけなのであなたには別の世界へいってもらうのです

俺の憤怒を軽くスルーする幼女神（諸悪の根源）

悪かったと思ってるのです。だから次の世界では少しあなたの全てをパワーアップさせたのです。

「…ふむ。ちなみにどのくらい？」

普通の人から見たらチートと言われるくらいです。

…普通より上からみたら、微妙なんじゃね？

そこは、あなたの努力次第なのです。あなたの努力次第でどんな力は増していくのです。

そうか…。

死にしまったことはもう覆らない。なら、次のチャンスにかけてみるか

「じゃあ俺はどの世界に行くんだ？」

それはあなたの家にあるゲームのどれかになると思っています

ランダム！？

それでは良い来世生活を〜なのです。

そう言われて俺の意識は遠のいていった。

## プロローグ（後書き）

今回はプロローグ。次からは遂に転生後の世界に入ります。

## 第一話（前書き）

今回は前回にも増して少ないです。

…増してるのに少ないとはこれいかに？

すいません。くだらないことを言いました。

少ないながら続きをどうぞ。

## 第一話

「朝、眩しい日差しが目に入るー

朝早く目が覚めた主人公橙藤拓也はこう思う。

（なぜいきなり5歳児？）

だいたい転生物と言えば生まれたてはやはやで自分の名前を親から授かることから始まるだろう。

もすもすひねもすゝなのです。拓也さんおゝと願いますのです

（おい神様、どうしていきなり5歳児なんだ？）

実は真恋姫の世界で麗羽さんの弟として転生する予定だったのですが…転生先間違えちゃったテヘツなのです。

（恋姫かー！！……いやしかし運が良かったのか）

さすがに若干のチートをもらってるからといってそんなにいきなりハードな世界に飛ばされても生き残る自信がない。

というよりあの金髪じゃじゃ馬縦ロールを抑えられる自信はもっていない。

（でも、いきなり5歳児の理由にはならないよーな）

あれなのですか？あなたは幼児プレイがお好みなのですか？

（いえ！！全く！！）

さすがにそんな変態じゃない……

ならよしとするのです。だいたい思い出そうとすれば思いせるはずなのですよ？

（うーん。それがあんまり思い出せないんだよね。）

自分の名前が前世と同じとか、父親と母親の顔とかはわかるんだが…。

（神様さ、俺の今世の記憶…なんとかならない？）

それが…前世で干渉してしまったから、今回私はほとんどタッチできない状態なのです。

えー…。ミスったうえにこの扱い…酷くね？

私にとってもこれが最後の接触なのですよ。それではよい今世生活…なのです。

（えー！？一番煎じ！？せめて最後にここがどこの世界なのか教えてくれえ！！）

ガチャ

「あら、拓也起きてたの。おはよう。」

「あ、おはようお母さん。」

まあしかたない。新しい生活を始めるとするか。

## 第一話（後書き）

はい、未だにこの世界に触れてしらいませんね。

次回にはちゃんと書きますから。

どうか平に、平にご容赦下さい。 m ( \_ \_ ) m

## 第二話（前書き）

今回は最初世界についてと、ちょっぴりなシリアスがあります。

…難しいorz

では駄文ではありますが観覧する方はどうぞ。こゆるりと。

## 第二話

どうも、橙藤拓也です。

現在の年齢は7歳になりました。

ここは海鳴市という場所で、今は小学1年生。聖祥大付属初等部に入学して一週間がたったところです。

今日は、僕の誕生日。

父さんと母さんが僕の誕生日を祝ってくれるそうです。

あ、ちなみに今は前世と同じ年の時と同じように自分のことを僕と言っています。

「…僕は誰に説明してるんだ？」

「いきなりどうしたの？拓也？」

「いや、なんでもないよ。母さん。」

「ははは。男には、そういう時もあるんだよ母さん。なあ拓也」

そう言って笑う父さん。

父さん、どういつ時なんですか？

そして母さんも、不思議そうな顔をしながら納得しないで…。

「まあいいわ。それよりも拓也。お誕生日おめでとう。」

「誕生日おめでとう。拓也。」

「ありがとう。父さん母さん。」

「拓也も小学生か…。もう学校には慣れたか？」

「うん。友達も出来た。」

「あら？。もしかしてこないだ遊びに来た…」

「うん、一刀。北郷一刀だよ。」

そう、みんな大好き我が北郷一刀は僕と同じクラスだった。

ただし、まだ小学生だけど…。

ちなみにクラスの女子からも人気がある。

たった一週間でだ。

もうすでに特級フラグ建築士としての片鱗をみせるなんて…。

…一刀恐ろしい子。

「そうか。友達を大切にするんだぞ。」

「わかってるよ。父さん。」

「よし！！。なら、父さんと母さんから誕生日プレゼントだ！！。」

そう言って父さんは小さな長方形の箱を取り出した。

「開けてもいい？」

「ええ。あけてあげなさい。その子もそれをまってるわ。」

母さんが妙なことを言っていたが僕は箱を開けてみた。

「おおー。」

箱の中に入っていたのは杖の形をしたアクセサリーだった。

柄の先は二つに分かれていて青と白二つの色であしらわれていた。

『ハロー。マスター』

「！。しゃべった！？。」

「そう。それはただのアクセサリじゃない。」

「それはデバイスといって、あなたのお守りよ。」

「デバイス……。僕のお守り。」

「そう。あなたがピンチになったり、助けたいものが出来た時、きつとその子が手助けしてくれる。」

「インテリジェント・デバイス、名前をアルバレストと言う。拓也、これが父さんと母さんからのプレゼントだ。」

「ありがとう！！。父さん、母さん。アルバレスト、よろしくたのむね。」

『こちらこそ。よろしく頼む。マスター。』

「さて、新しい家族も出来たことだし、母さんの特製料理をたべようじゃないか。」

「あ、父さん。ずるい！！。僕の誕生日だぞ。僕より先に食べるな！！。」

「もう、2人ともあわてなくてもたくさんあるわよ。」

- 翌日 -

「すまん拓也。留守番をたのむ。」

「ごめんなさい。急に仕事が入ってしまって…。」

どうやら父さんと母さんは、同じ仕事をしているらしく2人とも出かけることは珍しくはなかった。

しかも仕事の期間がバラバラでふた月かかるときもあればすぐ帰ってくるときもある謎のお仕事だ。

帰ってきたら聞いてみよう。

「いいよ。それに今はアルがいるしね。」

そう言って僕は首から下げているデバイス。アルバレストをかけた。

アルというのは僕がつけたあだ名だ。アルバレスト。だからアル。我ながら安直な発想。

「そうね。アルバレスト。拓也をたのむわよ。」

『了解。マスターのお世話はまかされました。』

「だああ!!。アル!!それじゃ僕がペットみたいになってるよ。」

昨日の相棒は、明日の主人か!!。冗談じゃない…。

「ははは。アルバレストは頼りになるな。これなら安心だ。では、行ってくる。」

「拓也。行ってきます。」

「行ってらっしゃい。父さん、母さん。」

『行っでらっしゃいませ。』

そう言って、父さんと母さんは仕事へ出かけていった。

それが最期の姿だとは、その時はまだ思っても見なかった。

｝side｝母

- とある別世界の研究所 -

私と夫はもともミッドチルダという世界で研究員をしていた。

その研究というのは人の手で人を造るという神さまから見たら、業の深いことをしてきた。

デステイニー・チルドレン。

今回、私と夫がこの仕事に呼ばれた理由がこれだ。

「かざね  
飾音」

「いずる  
出流さん。どうしたの？」

出流さん…夫が資料を持って私に話かけてきた。

「この資料によると…あの人は…。」

「ええ…。多分…だと思うわ。」

そう。この資料にかかれている内容。

フェイト・プロジェクト。

また、私たちはこんなことを…

「出流さん…。」

「ああ、話を聞きに行こう。」

そう言って私たちはとある部屋に向かった。

「プレシア・テストロッサ。お話があります。」

―物語の歯車は回り始めた―

## 第二話（後書き）

いかがでしたか？

今回、名前だけですが一刀くんをだしてしまいました。

多分今後もチヨイ役でひょこつとでるかもしれません。

次回は主人公紹介とデバイスについてかけたらいいなあと思っています。

ではまた

## 主人公、デバイス紹介。

主人公

とつとつたくや

橙藤拓也

神さまの遊びに巻き込まれてしまった不幸な元高校生。  
その神さまによって第二の生と若干のチートをもらった彼は新しい生活をおくろうとしている。

最初に転生したときはいきなり5歳から始まった。  
それ以前の記憶はほとんど言っていないほど覚えていない。（両親  
や自分の名前はかろうじて覚えている。）

デバイス

アルバレスト

拓也が両親から誕生日プレゼントにもらったインテリジェント・デバイス。  
バイス。

形状は杖。杖の形は柄の先が二つに分かれている。（つまりフィン

ファンネルの形)

色は青と白。性別は男型。

作り手である拓也の両親には敬語だが、基本的にはタメ口。

## 主人公、デバイス紹介。（後書き）

今回は紹介でしたが…あんまり需要ないなあと思いました。

他の方が書いてるやつはとてもわかりやすく需要あるのに…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1363s/>

---

これは夢ですか？いいえ、それは転生です

2011年10月8日23時27分発行